おくのほそ道 ・旅立ち・

あらすじ 次の空欄に適語を入れて、内容を整理しなさい。

第一段	第二段
一度去って帰ることのない時の流れは、いわば〔①　　〕であり、人生もまた旅と言える。多くの古人が旅に生き旅に死んだ。私も、いつからか〔②　　〕がやまず、〔③　　〕を越えて奥州へ旅に出たいという気持ちにかられた。庵を人に譲って、杉風の別宅に移った。	三月二十七日、おぼろにかすむ江戸を旅立った。親しい人々は前の晩から集まって、〔④　　〕まで見送りに来た。行く春を惜しみつつ、人々と別れる悲しみの涙にくれながらも、「行く春や」の句を詠んで、〔⑤　　〕のはじめとした。

重要語句 次の語句の意味を答えなさい。

(1) いづれ

(2) あけぼの

(3) むつまじ

重要文法 次の各問いにそれぞれ答えなさい。

1 傍線部を文法的に説明しなさい。

(1) 旅に死せるあり。（一〇〇・4）

(2) 片雲の風に誘はれて（一〇〇・4）

(3) 三里に灸据うるより（一〇〇・8）

(4) 住める方（一〇〇・8）

2 (1)「草の戸も」（一〇〇・10）と(2)「行く春や」（一〇一・5）の句について、(a)季語と(b)切れ字を答えなさい。

(1) (a)

(b)

(2) (a)

(b)

内容理解　次の各問いにそれぞれ答えなさい。

1「古人も多く旅に死せるあり。」（一〇〇・3〜4）とあるが、この部分に込められた芭蕉の気持ちとして適当なものを次の中から**一つ**選んで記号で答えなさい。

ア　古人の死を教訓に旅の安全を祈念しよう。
イ　古人のように自分も旅中に死ねるなら本望だ。
ウ　古くから旅に危険はつきものだから気をつけよう。
エ　古人のように死を覚悟した旅ではいけない。

□

2「白河の関」（一〇〇・6）や「松島」（一〇〇・8）のように和歌に詠まれた場所を何というか。次の中から適当なものを**一つ**選んで記号で答えなさい。

ア　観光地　　イ　景勝地　　ウ　歌枕　　エ　旧跡

□

3「春立てる霞の空に」（一〇〇・6）の「立てる」は掛詞になっているが、掛けられている**二つ**の意味を説明しなさい。

□

4「草の戸も」（一〇〇・10）の句について、(a)「草の戸」と対応している言葉を本文から**五字**、(b)対比されている言葉を句中から**三字**で抜き出しなさい。

(a) □

(b) □

5「またいつかはと心細し。」（一〇一・2）とあるが、何を心細く思っているのか。次の空欄にあてはまる語句を補って文を完成させなさい。

A　や　B　にまた戻ってきて　C　を見ることができるだろうかと、　D　を離れて長旅に出ることを心細く思っている。

6「行く春や」（一〇一・5）の句について説明した次の文の空欄にあてはまる語句を補って文を完成させなさい。

過ぎ行く　A　を惜しんで、空では鳥が悲しげに鳴き、水の中の魚は目に　B　を浮かべている。そのような季節に私は江戸の人々との別れを　C　つつ、旅立って行くのである。